

JICA支援で海外挑む

東北地方の中小企業が国際協力機構（JICA）の支援を活用し、海外での事業展開に挑戦している。ニーズ調査や実証にかかる資金やコンサルティング支援を受けることができる。東北では人口減少で市場が縮小していく恐れがあるなか、独自ビジネスの販路拡大の一助になりそうだ。

建設事業や発光ダイオード（LED）照明などを手掛けるニイヌマ（宮城県石巻市）は、ベトナムで太陽光発電システムの実証事業を展開した。同国イエンバイ省の山間部集落で300世帯に太陽光パネルと蓄電機材を設置した。送電網が整備

東北の中小、強みは独自技術

東北地方でのJICA中小支援の活用例		
社名	展開国	事業内容
ニイヌマ (宮城県石巻市)	ベトナム	山間部での太陽光発電システム
ヤグチ電子工業 (同石巻市)	インド	視機能訓練装置
山本製作所 (山形県東根市)	タンザニア	コメ乾燥装置
コスモテック (福島県郡山市)	ベトナム	高機能な介護福祉機器
栄組 (岩手県遠野市)	ブラジル	インフラ補修技術

(出所) JICA東北センター

されていない地域に電化設備を導入することで生活環境を改善する狙いがあった。同社が活用したのがJICAが提供する「中小企業・SDGsビジネス支援事業」だ。ニーズ確認調査とビジネス化実証事業の2つのメニューが用意され、それぞれ上限1500万円、4000

現地の習慣など助言 販路拡大に一役

万円までの経費を支援する。コンサルタントによる伴走支援も受けられる。このほど開かれた報告会でニイヌマのベトナム法人代表を務める箕輪佑耶氏は、資金面だけでなくJICAの知名度の高さがメリットになったと振り返る。「支援を活用したおかげで、日本の中小企業でも信用を確保できた」。事業は無償だが、ニーズが確認できたことで今後は商用化やバン格拉デシユなど第三国への進出も検討する。

ヤグチ電子工業は視機能訓練装置「オクルパッド」のインド展開に挑戦した。小児弱視は視機能の発達不良によって引き起こされる。従来は正常な目を眼帯で隠し、異常のある目でモノを見る訓練をするが多かった。眼帯による摩擦で目が炎症を起こしたり正常な目の視力が弱ったりすること



が課題だった。オクルパッドは特殊な偏光フィルムを貼ったサングラスと、偏光板を外したタブレット端末を組み合わせたもの。端末画面は裸眼で見ても真っ白だが、サングラスをかけると画像や映像が見える。患者が訓練したい片方の目だけに偏光フィルムを貼ることで正常な目の機能を阻害せず、眼帯による摩擦も避けられる。インド展開の背景には、日本の人口構成との違いがあった。小児弱視は子供の約3%が発症するが、少子化の進む日本では「市場がすぐに飽和する」（同社の佐藤雅俊社長）。インドでは毎年50万人超が発症しており、装置活用が見込め

た。インドでの事業終了後もJICAが海外進出を後押ししたと佐藤社長は語る。現在はウズベキスタンやケニアなどでも事業化に取り組んでおり、「各国のJICA事務所から現地の国民性や習慣などについて助言を受けることができた」。JICAの支援事業は東北で11案件が進行中だ。25年度も募集しているが、担当者によれば東北からの申請件数は例年全国でも少ないという。「気付いていないだけで、日本の製品には海外で勝負できる強みがある」（佐藤社長）。独自技術を持つ東北の中小が海外に挑戦するきっかけとして、同制度を活用する意義はありそうだ。（岡西善治）